

森鷗外「里芋の芽と不動の目」に見られる〈Resignation〉について

——〈諦念〉との差異を観点として——

狩 野 仁

序

森鷗外の〈諦念〉概念についての研究は、鷗外研究において比較的進んでいる分野である。岡崎義恵によると、鷗外の〈諦念〉は、「常に何物かを心の中において放棄するといふことである」（『鷗外と諦念』宝文館出版、一九六九・一二、二七三頁）とされている。また今日の研究では、鷗外における〈諦念〉と後述するドイツ語の〈Resignation〉は同一のものとして見られている傾向にある。

しかしながら鷗外の〈Resignation〉と、現在研究者が論じている〈諦念〉＝〈Resignation〉とに解釈の齟齬が見いだせる。また、研究者によって〈諦念〉や〈Resignation〉の定義は異なっている。その原因としては、以下二点の問題が挙げられる。第一に、鷗外の〈Resignation〉概念がそもそも曖昧であるという点である。鷗外が自身の心境を表す際に使用していた言葉は「Resignation」だけではない。鷗外は文学作品や随筆、日記等において「Resignation」

以外にも「あきらめ」「resignation」「傍観」などの多様な類語を用いている。このことが、現在の〈諦念〉〈Resignation〉が、同一のものとして論じられている一因であると考えられる。そして第二に、長い研究史の中で、鷗外の〈Resignation〉がその時々において自由に解釈されてきたという問題点が挙げられる。鷗外の〈諦念〉〈Resignation〉についての研究は、様々な論説が出来しているのが現状である。

そこでまず〈Resignation〉に関する鷗外自身の言説を確認したい。〈Resignation〉は鷗外が一九〇九年一二月の『新潮』にて発表した随筆「予が立場」に見られる。^①「予が立場」は、『鷗外日記』における「新潮の中村武羅夫来れるに Resignation の説を書きて遺す」（『鷗外日記 明治四二年一月七日』『鷗外全集』第三五卷、岩波書店、一九七五・一、四二二頁）という一文から、現在は「Resignation の説」とも呼称される。鷗外は「予が立場」において、以下のよう

私の心持を何といふ詞であらはしたら好いかと云ふと、Resignationだと云つて宜しいやうです。私は文芸ばかりではない。世の中のどの方面に於いても此心持である。それで余所の人、私の事をさぞ苦痛をしてゐるだらうと思つてゐる時に私は存外平気であるのです。勿論Resignationの状態と云ふものは意気地のないものかも知れない。其辺は私の方で別に弁解しようとも思いません。

（「予が立場」、『鷗外全集』第二六卷、岩波書店、一九七三・一二、三九三頁）

以上は、鷗外が執筆した作品等に関して、他人から批判や同情をされようとも、自分の好きなことをやっているだけであるから「存外平気」の心持ちである、という文脈の中で発せられた。また鷗外は「私の考では私は私で、自分の氣に入つた事を自分の勝手にしてゐるのです。それで氣が済んでゐるのです」（三九二頁）と主張する。他者からの批判や同情に対し、反論することを諦め、放棄したうえで、「私は私」という心情を常に持ち、心の平静を保っていることが窺える。このように鷗外は「予が立場」において、「Resignation」を使用している。ではなぜ「諦念」ではなく「Resignation」という外国語を使用したのか。これについては以下のように述べる。

かう云ふ心持は愚痴とか嫌味とか云ふ詞の概念とは大へんに違つてゐると信じてゐます。いつか私は西洋にある詞で、日本にはない詞がある、随つてさういふ概念があちらにあつてこちら

に無いと云ふやうな事を話したことがあります。縦令両方に其の言葉はあつてもそれが向うでは日常使はれてゐるのに、こちらでは使はれてゐないといふ関係もあるのです。

（「予が立場」、前掲、三九二頁）

鷗外は、自分の心境が当時の日本に存在する語では表すことができないとして、「Resignation」という外国語をそのまま使用していた。また作中で「諦念」は一度も使用されず、「Resignation」のみが使用されている。後述するように、今日では竹盛天雄や岡崎義恵らの研究において、「予が立場」を参照しながらも、〈諦念〉と〈Resignation〉は同一視されている。しかしながら、この二つの概念は単純に同一のものとして見てはならないと考えられる。

次に鷗外と同時代を生きた人物や鷗外の死後間もない時代の研究者などとはどのように言及していたのか確認する。鷗外の〈Resignation〉に「いち早く言及した人物として木下幸太郎が挙げられる。幸太郎は「森鷗外」（『岩波講座日本文学』、一九三二・一一）にて以下のように述べる。

明治四四年は現代の事象殊に作者の耳聞目見の材料を以てした傑作の多く現はれた時である。「雁」、「藤柄絵」、「心中」、「百物語」がそれである。人を識るの眼はいよいよ鋭くなり、鷗外の小説の奥底を貫流するResignationの気分はいよいよ冴えて来た。「中略」「雁」や「藤柄絵」や「百物語」に見られるあの皮肉、あの寂しさ、あの毛ほどの心の動きをはつきりと拡大す

る顕微鏡、望遠鏡のやうな明視は誰にも許された心性能力ではない。

(木下李太郎『森鷗外』、『木下李太郎全集』第七巻、岩波書店、一九五〇・一一、四二頁)

ここで李太郎は鷗外の作品に流れる「気分」を「Resignation」という外国語のまま説明し、「諦念」と意識してしまわない。ちなみに李太郎は〈Resignation〉は、「悲哀」「寂寥」といった寂しさのことだと主張している。たとえば「その随筆、創作の至る処に、悲哀に似る一種の気分を感じる」(五二頁)、「鷗外全集全一八巻を読んだが、読み了つて心中に寂寥の情緒の湧起するを防ぐを能はなかつた」(五二頁)といった言及が見られる。^②

李太郎以降の〈Resignation〉研究においても事態は同様である。鷗外の心境を論じる際に「諦念」は使用されていない。「所謂あきらめといはれるResignation」(唐木順三『森鷗外』世界評論社、一九四九・四)、「傍観者」(沢柳大五郎『傍観者鷗外といふこと』『思想』第二二〇号、一九四〇・九)、「ヴィタ」「自我」「自己」(高橋義孝『森鷗外』『森鷗外』新潮社、一九五四・一一、六八頁)というように、〈Resignation〉が評価されている。

このように〈諦念〉と〈Resignation〉は、初期研究の段階では同義とされていない。しかしながら現代では〈Resignation〉と〈諦念〉は同一のものとして扱われている。その背景として、岡崎義恵の研究がある。岡崎は鷗外作品に登場している「諦念」の類語に対

して、以下のように述べる。

鷗外は「諦念」という語を屢々用ゐているが、これに関連して「あきらめ」「諦」「resignation」「résignation」「Entsagung」などといふ語を用ゐてゐる。私はこれらの語を大体同義語だと認める。(『鷗外と諦念』、前掲、二六七頁)

以上のように、岡崎は〈諦念〉(Resignation)その他の語を一括して同義のものと見做している。一方で、岡崎は〈諦念〉に関する問題を研究の俎上に載せた第一人者である。岡崎以降の研究者が〈諦念〉について論じる際、この一九六九年の岡崎の言及が引用されることが多い。竹盛天雄も「Resignation, résignation あるいは「諦念」の「詞」が、鷗外を批評する中心的な符牒になっている」(『鷗外 その紋様』小沢書店、一九八四・七、二〇二頁)と論じている。「Resignation, résignation あるいは「諦念」とあるように〈諦念〉と〈Resignation〉を同列に並べ、その差異を見いだしていない。他にも、両概念を同一視している論は散見される。^③

岡崎、竹盛らの研究に対し、小堀桂一郎は「Resignation」を「諦念」という語で訳すことに疑義を呈している。小堀は鷗外が一九一〇年に短編小説を多数執筆したことを指摘し、その作品群に鷗外の内心が反映されていると主張した。小堀はその作品群を「内心を微妙に反映した掌編小説群」(『ミネルヴァ日本評伝選 森鷗外——日本はまだ普請中だ——』ミネルヴァ書房、二〇一三・一、四〇五頁)と呼称した。小堀は七点の作品を例に挙げ、その中には後述する

「里芋の芽と不動の目」(『昂 第二号第二卷、一九一〇・二) も含まれている。この作品群の中でも「杯」(『中央公論 第二五年第一号、一九一〇・二)「木精」(『朝日新聞 一九一〇・一・一六、一七)における主人公の精神には、ものごとを諦めると同時にある積極性も垣間見えるとし、小堀は鷗外の「予が立場」に表れる「Resignation」を「達観」と訳す方がよいと主張する。このように小堀論においても「諦念」という訳語は斥けつゝも、〈Resignation〉を日本語に翻訳しきろうとする姿勢は残存している。

本稿では、先行研究で詳細に言及されることが少なかった〈諦念〉と〈Resignation〉の差異に着目する。鷗外が言及した通り、〈Resignation〉は日本語には存在しない、ドイツ語特有のニュアンスを持つ。そしてそのドイツ語特有のニュアンスを鷗外が作品に取り込んでいるのではないか。

検討する作品は「里芋の芽と不動の目」である。本作品は先行研究において、〈諦念〉が表れていると論じられてきた。本稿においては、主人公の人物像が〈諦念〉で括り切れるものではなく、ドイツ語特有の〈Resignation〉の諸要素によって成り立っていることを論証する。本論は〈Resignation〉の原義に立ち返って「里芋の芽と不動の目」を読みかえるものである。

まずはそれぞれの語本来の意味を検討することにより、両者の差異を明確にする。

1. 〈Resignation〉の語史的検討

本章では、「諦念」と「Resignation」という語そのものについての辞典的な検討に移る。岡崎以下が用いた「諦念」に加え、鷗外がドイツ留学していた点や、「予が立場」において自身の心情を「日本にはない詞」であると表した点を鑑みると、明治時代の独和辞典を調査することで「Resignation」というドイツ語本来の意味を確認する必要がある。まずは「諦念」の調査結果である。

まず、岡崎論(一九六九年)頃の「諦念」の意味としては先述の通り、物事を放棄する、断念するといったものが存在している。そして明治・大正時代に出版された各種辞典においては、「諦念」という語は管見の限り発見できなかった^④。調査の限りでは「諦念」という語は一般的には普及していなかったと考えられる。

次に独和辞典に見られる「Resignation」調査についてである。「Resignation」が立項された同時代の独和辞典は四点存在した。それぞれの解説は以下の通りである。

1. 「Resignation」…開封。辞退。譲与。委託。

(谷口秀太郎編『独和辞典』大倉書店、一八九六、五五〇頁)

2. 「Resignation」…①辞退、退官、致任、掛任…譲位。②辞職願、

辞表。③棄却、委棄、放棄、断念。④委従、屈従、覚悟…克己。

(保志虎吉編『大正 独和辞典』三省堂、一九一
二、九九六頁)

3. 「Resignation」…離職、放棄、棄却…諦[あきらめ]、断念。

(登張信一郎『新式 独和辞典』大倉書店、一九
一一・四、一六二頁)

4. 「Resignation」…辞職。禪讓。放棄。棄却。諦[あきらめ]。
断念。

(登張信一郎『新訳 独和辞典』大倉書店、一九
二六・四、七七〇頁)

このように、どの辞典においても「放棄」という意味より「辞
退」という意味が先行していることが分かる。また、「辞職」「退
官」「讓与」「讓位」等の意味は、日本語の「諦念」に存在していな
い。二つ目の辞典では、「Resignation」に「覚悟…克己」といった
ニュアンスが含まれている。ここには、今までにはないどちらかと
いえば積極的な意味合いが含まれている。^⑤

ただし鷗外は「予が立場」において「Resignation」を「日本に
はない詞」であるとしている。このことから「Resignation」を鷗
外の理解したかたちで理解するためには、日本語に依らない辞典
(独独辞典)のニュアンスも確認する必要がある。

当時出版された独独辞典を二点確認できた。まず一点目
“Wörterbuch Deutschen Sprache” (Leipzig: Verlag von Wiegand,
1876, p. 738) と、他「Resignation」の解説に「Auf Etwas r. mit

Aufopferung verzichten. [訳：犠牲を払って何かを放棄する]と
ある。その他には「sich in Etwas übergeben. [訳：何かに身を
委ねる]」、「Resigniert gefasst übergeben. [訳：辞任、落着いて
いる、引き渡す]」といった解説がある。続いて二点目の辞典
“MURET SANDERS encyclopädisches Wörterbuch” (1901, p. 583)
には「Aufgeben n. Niederlegen f eines Amtes [訳：ある一つの役
職を辞任する]」や、「Unterwerfung [訳：降伏]」、「Ergebung
[訳：服従、帰順]」、「gelassenheit [訳：冷静、沈着、落着き]」
といった解説が見られた。

このように独独辞典における「Resignation」の解説においても、
「辞職」「辞任」といった意味合いが強い。何かからリタイアする
といったニュアンスが見て取れる。リタイアするもの、手放すものは、
例えば「役職」や「権利」である。また独和辞典には見られなかつ
た解説としては「降伏」「落着き」といったものがある。逆に独
和辞典に見られた「覚悟…克己」といったニュアンスは、二点の独
独辞典には見られなかった。

以上当時の独和・独独辞典での「Resignation」には、〈諦念〉に
は存在しない意味が内包されていることが分かった。すなわち
(1)「辞職」「辞任」、(2)「服従」「打ち負かせ置く」、(3)「覚
悟」「克己」、である。これらは、鷗外の〈諦念〉について研究者が
論じてきた内容にも存在しない。鷗外はこのようなドイツ語特有の
意味を含む概念として「Resignation」を作中に用いたのではない

か。次章では、辞典調査において新たに明らかになったことを踏まえて、これまで〈諦念〉が見られるとされてきた「里芋の芽と不動の目」を、〈Resignation〉の原義に照らしながら読み替えたい。

二、「里芋の芽と不動の目」における

〈Resignation〉

「里芋の芽と不動の目」は一九一〇年二月、『昂』第二年第二号に掲載された。その後、単行本『涓滴』（新潮社、一九一〇・一〇）、『還魂録』（春陽堂、一九一七・八）に収録された。先行研究では、一九一〇年に起こった大逆事件との関わりや、一九一一年に公布された工場法の制定と関連付けられたものがある^⑥。また、主人公増田翼の人物像について言及している論が多く見られる。本章では、先行研究で論じられてきた増田の人物像や、〈諦念〉と同一のものと見て見なされてきた増田の言葉である「己は己の意志」に着目する。そこに「Resignation」の原義を照射することにより、新たな増田の人物像を見いだしたい。

本作は「東京化学製造所」の創立二五周年を記念して、「紅葉館」で宴会を開催している場面から始まる。「東京化学製造所」所長であり、理学博士でもある増田が工場長としての仕事観や自身の幼少期からの成功体験などを来客者たちに語るといった内容になっている。宴会には「農省務大臣」「大学総長」「理科大学総長」らが招かれ、講談や舞踊、芝居などの演目が盛大に行われた。冒頭は宴会の

規模の大きさや来賓の顔ぶれなどから増田の人望の厚さが演出される。中盤から後半にかけて、物語は増田自身による成功者としての半生語りに集約されていく。

増田の人物像は、作中では大きく二種類に分けて描かれている。

一つ目は増田の仕事に対する考え方である。増田は職工たちの賃金問題と工場経営に関して以下の考えを有している。

社会問題にいくら高尚な理論があつても、いくら緻密な研究があつても、己は己の意志で遣る。職工にどれ丈のものを与えるかは、己の意志でその度合が極まるのである。東京化学製造所所長になつて、二五年の間に、初め基礎の危うかつた工場を兎に角今の地位まで高めた理学博士増田翼はかく信じてゐるのである。

（「里芋の芽と不動の目」『森鷗外全集』第六卷、

岩波書店、一九七二・四、二五一頁）

「己は己の意志」という言葉から窺えるように、増田は自身の経営理念に確固とした自信を有している人物であると言える。

二つ目は病死した兄と比較した自身の性格の自己評価についてである。兄と自身について増田は以下のように対比している。

「己なんぞも西洋の学問をした。でも己は不動の目玉は焼かねえ。ぼつぼつ遣つて行くのだ。里芋を選り分けるやうな工合に遣つて行くのだ。兄きなんぞの前へ里芋の泥だらけな奴なんぞを出さうもんなら、かます籠め百姓の面へ敲き附けちまふだら

うよ。」

「己は化学者になつて好かつたよ。化学なんという奴は丁度己の性分に合つてゐるよ。酸素や水素は液体にはならねえといふ。ならねえという間はその積りで遣つてゐる。液体になつても別に驚きやあしねえ。なるならなるで遣つてゐる。元子は切つたり毀したりは出来ねえ。Atom は atemnein で切れねえんだといふ。切れねえという間はその積りで遣つてゐる。切れたつて別に驚きやあしねえ。切れるなら切れるで遣つてゐる。同じ江戸つ子でも、己は兄きのやうな Fanatiker とは違ふんだ。どこまでもねちねちへこまずに遣つて行くのも江戸つ子だよ。」

（「里芋の芽と不動の目」、前掲、二五七—二五八頁）

兄は、母が信仰していた不動明王の掛け軸に「線香の燃えてゐる尖」を押し付け、不動明王の目玉を焼きぬいてしまふ。この出来事から、増田は兄のことを「旧思想の破壊」をする「Fanatiker」（狂信者・熱狂者）な人物であつたと評す。一方で、増田は幼少の頃、戦争の疎開先で百姓の子どもたちと一緒に、里芋の芽を選び分ける作業を行っていた。この経験から増田は自身のことを、里芋の芽を「ぼつぼつ遣つて行く」ように、与えられた仕事を着実にこなす実直な人間であると自己分析している。

また化学を引き合いにした発言からも分かる通り、増田は一つの事柄に執着しすぎないという性格を有していることが分かる。「水素」や「酸素」、「元子」といった性質が変化する物質と、自身の性

格を重ね合わせている。増田と兄は「同じ江戸つ子」でありながらも、兄のような「Fanatiker」な性格に対して、増田は「どこまでもねちねちへこまずに遣つて行く」性格になっている。この二人の性格の差異が、仕事の成否を分けているのだと増田は考えている。

瀧本和成は、こうした増田の人物像について「私利私欲に走らない経営者の一つの在り方」（森鷗外「里芋の芽と不動の目」論、「論究日本文学」第五六号、一九九二・五、四九頁）、「自社の利潤だけに固執せず、自身の富そのものにも執着することのない、それゆえに好意と信頼を勝ち得ている経営者」（五六頁）と評している。瀧本は増田の性格について経営者という観点から論じ、増田を「利他的で実用性に重きを置くような人間である」（五六頁）と総括している。

それに対して、原貴子は疑義を呈している。原は作品冒頭の「東京化学製造所」が「職工の賃金問題」に対して「新聞で盛に攻撃」されているという事実に着目した。このことから、工場主である増田が取り締まっていた、職工たちに対する給与体制に問題があつたことを指摘している。増田の言動や行動理念は「職工を下層に生きる者として載然と区別する階層意識に根差している」（森鷗外「里芋の芽と不動の目」論—階層の拘束力」、『鷗外』第九〇号、二〇一二・一、四八頁）と原は言及し、「増田の行動基幹である「己の意志」の根底に、階層差の肯定という問題が見いだせる」（四九頁）と主張した。このように、原が論じる増田の人物像は「私利私欲に走ら

ない」「利他的な人間」といった瀧本の言う増田の人物像とは相反していることが分かる。増田の人物像は、〈利他／利己〉という枠組みでこれまで論じられてきた。

後にも触れるが、本論ではこの二項対立を止揚するものとして、〈Resignation〉を位置づける。〈Resignation〉は自分と他者の両方のために何かを「譲与」「辞任」するものだからである。

これに関して、竹盛天雄は「増田博士の『己は己の意志』という姿勢は、工場主としての自律にかかわるものとして語られている」

（『鷗外 その紋様』、前掲、二五七頁）と論じている。増田は自身の意志で物事を決定して行動に移す実行力のある人物であると竹盛は評している。さらに竹盛は増田を象徴する「己は己の意志」と「予が立場」における鷗外の「私は私」という考え方が共通していると論じている。「己」（里芋の芽と不動の目）における増田翼の人物像について）に追究される「私は私」は、工場主という立場の人間であるが、これは換言すれば、利己とはちがう利他的な「私は私」である。自立の問題がそこに当然のように絡んでいる」（『鷗外 その紋様』、前掲、二五七頁）。先に確認した通り、竹盛は鷗外の〈Resignation〉のことを「Resignation, resignation あるいは「諦念」と言及し、それらの語を同列に見なした。であるならば、増田の『己は己の意志』も大まかに〈諦念〉と括っていることになる。

たしかに巨視的には、誰かから評価されることを諦めるという点において、岡崎や竹盛らによって論じられてきた〈諦念〉と増田の

心境は共通する部分はある。しかしながら微視的には、増田の「己は己の意志」には、〈Resignation〉のドイツ語特有のニュアンスが表出している。

ドイツ語の〈Resignation〉には独和辞典にて確認した「覚悟」「克己」といった意味が含まれていた。それは、他の辞典での「Resignation」の解説と大きく異なったニュアンスを含んでいる。他の辞典には「辞任」「見放す」「放棄する」といった、どちらかといえば消極的な意味が見られた。これに対し、独和辞典の「覚悟」「克己」だけは、積極的な意味合いであった。

本文中にも増田の積極的な〈Resignation〉が見られる。まず先に引用した、「社会問題にいくら高尚な理論があつても、いくら緻密な研究があつても、己は己の意志で遣る」（二五一頁）という考え方である。増田は工場の経営方針に絶対の自信を持っている。工場を経営していく上での信念を、彼は以下のように語る。

工場を立て、行くには金がある。併し金ばかりでは機関が運転して行くものではない。職工の多数の意志に対抗する工場主の一人の意志がなくてはならない。工場主は自分の意志で機関を運転させて行くのである。

（『里芋の芽と不動の目』、前掲、二五一頁）
増田は工場を経営していく上で重要なことは金ではなく「工場主の一人の意志」であると述べる。工場の経営を「己は己の意志で遣」っていくといった「覚悟」が見られる場面である。さらに「己は己

の意志」には「克己」的な意味合いも含まれている。工場が一度新聞で攻撃されたという過去がありながら、「己の意志」を貫き通して会社を経営する方針を決めた増田の意志には、過去の自分を乗り越えるといった「克己」的な意味合いも含まれている。

また本作品には「覚悟」「克己」だけではなく独和・独独辞典に見られた「讓位」「引き渡す」といったニュアンスも含まれている。増田の「引き渡す」精神が見られる場面を見てみよう。

己には己の為事がある。己なんぞは会社の為事をして給料を貰つてゐりやあ好评のだ。為事は一つありやあ好评のだ。思付なんぞはいくらでもあるから、片つ端から人にくれて遣る。それを一つ掴まえて為事にする奴が成功するのだ。中には己の思付で己より沢山金をこしらへるものもある。金が何だ。金くらゐ詰まらないものが、世の中にありやあしねえ。

（「里芋の芽と不動の目」、前掲、二五四頁）

増田はこの場面で「思付」や「金」に執着することのない人間として描かれている。「金が何だ」という言葉で金を稼ぐことへの忌避感をあらわにしている。その他にも「会社は事業をする為に金がある。己はいらねえ」（二五四頁）、「金を溜めるやうなしみつたれは江戸子ぢやあねえ」（二五四頁）と、増田は徹底して金稼ぎに対する嫌悪感を示している。この嫌悪感は、金に執着する他の経営者と、自分自身とを増田が明確に区別している証拠である。自己の利潤を追求せず会社の発展を望むという点では、竹盛や瀧本が触れて

いたように、増田は利他的な人間であると言える。しかしながらここでは、増田は利他的な人物であると評価を終わらせるよりも、会社を経営していくために、結果的に利他的になってしまつても構わないと判断していると評価するほうが適切だろう。人に仕事を「くれて遣る」行為には、辞典に見られた、位を譲り渡す、地位や役職を引き渡すといった精神が見てとれる。ここには「覚悟」「克己」だけでは表しきれない、ましてや何か物事を諦める（諦念）だけでは到底表しきることのできない複合的なニュアンスが含まれている。

また、先に引用した通り、「己は兄きのやうなFuturistとは違ふんだ」と増田が言及する場面がある。増田は里芋の芽を「ぼつぼつ遣つて行く」、何事をするにおいても「ねちねちへこまずに遣つて行く」とも言及している。ここからは、増田が何事にも落ち着いた態度で冷静に対処し、地道に物事を進めていく人物であることが分かる。この態度には、独独辞典で確認した「落ち着き」「冷静」「沈着」のニュアンスを見てとることができる。

最後に増田の覚悟とあきらめが見られる場面として、幼少期の回想をする箇所が挙げられる。増田の「己は己の意志」という覚悟は、幼少期から存在していたものである。増田は幼少の頃、上野戦争勃発により、「秩父在に昔から縁故のある大百姓」（二五五頁）の元へと疎開する。戦争が落ち着いたころ、幼い増田は里芋の芽を選り分ける作業を手伝うように百姓から言われる。その時のことを増田はこう語る。

或日の事、かますといふものに入れた里芋を出しやあがつて餓鬼共にむしらせてゐやがるのだ。「中略」己が立つて見てゐると、江戸の坊様も手伝つてお遣なさいと抜かしやあがる。大ぶ江戸の坊様を安く踏むやうになりやあがつたんだな。かうなつちやあ為方がねえ。己もそこへ胡座を搔いて里芋の選分を遣つ附けた。ところが己はちびでも江戸子だ。こんな事は朝飯前だ。外の餓鬼が策に一ぱい遣るうちに、己は二はい遣るのだ。百姓奴びつくりしやあがつた。そして言草が好いや。里芋の選分は江戸の坊様に限ると抜かしやあがる。

（「里芋の芽と不動の目」、前掲、二五六頁）

百姓から里芋の芽の選別作業を頼まれた増田は、初めは「大ぶ江戸の坊様を安く踏むやうになりやあがつたんだな」と感じる。ここから増田は、幼少の頃から「江戸の坊様」である自分と「餓鬼共」である地方に住む子どもたちを身分で区別していたことが分かる。原が主張した「階層差の肯定という問題」は増田が幼少の頃から有していたものであったことが窺える。しかし、増田は地方の子どもたちと自身の階層差を認めていながら、「かうなつちやあ為方がねえ」と言い、子どもたちと一緒に里芋の選別を始めるのである。この「かうなつちやあ為方がねえ」という言葉には、自分が地方の子どもたちとは違う存在であるという「階層差の肯定」へのあきらめがある。ここでのあきらめは、岡崎らの言及するただの〈諦念〉ではない。〈Resignation〉における「役職の放棄」や「権利の放棄」

である。一定の地位を手放すといったニュアンスを含んでいるからだ。さらに自分は「江戸つ子」であるという矜持から、頼まれた作業を地方に住む子どもたちの二倍のスピードで進めている。増田は幼少の頃から自分が上位の存在に立つものであるという自覚を持ちつつ、持てる者の義務を果たそうとする「覚悟」を同時に持ち合わせていたのである。ここでの増田の心境には、単なる「覚悟」だけではなく、あきらめと「覚悟」が同時に存在している。鷗外は「かうなつちやあ為方がねえ」の一言に〈Resignation〉における複数の意味を共存させている。この心境は日本語一語で表現しきることには難しく、まさしく〈Resignation〉としか言いようのない心境なのである。鷗外は日本語と外国語（ここではドイツ語）の差異をはつきりと意識していた。そして日本語には還元できない〈Resignation〉のニュアンスを日本の江戸ことば「かうなつちやあ為方がねえ」に投影させている。ここには二つの言語を用いた鷗外の言葉遊びの意識が垣間見える。

以上より、本作品はドイツ語「Resignation」に見られる「覚悟」「克己」をはじめとする様々な特有のニュアンスを基盤とした、〈Resignation〉概念によって形成された作品であると言える。竹盛は鷗外の「予が立場」に見られる「私は私」の意志と増田の「己は己の意志」を同列の〈諦念〉と認識していた。確かに両作品に見られる意志は、他者からの意見に左右されないといった一側面では近似している。しかしながら、「己は己の意志」には物事を諦めると

いった単一的なニュアンスよりも、ドイツ語の「Resignation」由来である、複合的なニュアンスが表れている。「引き渡す」「役職の放棄」「冷静」「落ち着き」「覚悟」といった一つの日本語だけでは集約しきれないものによって、増田翼という人物は合成されていたのである。

結

本研究では、今まで論じられてこなかった鷗外の「諦念」と「Resignation」の差異に着目した。同時代の独和辞典、独独辞典などを調査することで、「Resignation」には「諦念」に存在しない様々な意味合いがあることが分かった。本稿では以上のように、まずは今まで同一のものとして扱われてきた「諦念」と「Resignation」の切り離しを行った。さらに、「Resignation」のドイツ語特有のニュアンスを鷗外が「里芋の芽と不動の目」において表現していることを論証した。本作品に含まれる様々なニュアンスは「諦念」の一語で言い表すことはできない。翻訳もできないため「Resignation」としか言いようがない。鷗外が「Resignation」「resignation」などと作品によって表現を変更していた理由は、各作品に、外国語特有の機微を表出させるためであったのではないか。

【付記】

本論文における森鷗外作品の引用は、とくに断りが無い限り『鷗外

全集』（岩波書店、一九七一・一一―一九七五・六）に拠った。引用に際して、漢字は原則として新字に統一し、旧仮名遣いはそのままとした。また、ルビ、傍線等は適宜省略・付け足しを行った。年号の表記は全て西暦で統一した。

註

① 後述する岡崎、竹盛、小堀らの論においても、「諦念」について論じる際に「予が立場」を参照している。

② 奈太郎はその後も「Resignation」の思想は鷗外のどの小説にも見える。鷗外は自らを「傍観者」と称した（『森鷗外』、五二頁）と論述している。「Resignation」が鷗外作品に通底して見られると評し、「悲哀」以外のニュアンスとして鷗外の「傍観者」という言葉を採用している。やはりこゝでも「諦念」は選定されていないことが分かる。

③ 岡崎、竹盛以外に「諦念」「Resignation」を同一視している論について、以下のものが挙げられる。まず浅井淑裕は鷗外作品「雁」に見られる登場人物「お玉」の心境を「諦念」であるとして論を展開した。「雁」において、お玉がドイツに留学する予定の岡田という人物に自身の恋心を打ち明けられず、自ら岡田に対する恋慕の情を断念する場面がある。お玉が自身の恋を断念するという行為を、浅井は「あきらめ」（レジグナチオン）であったわけである（「雁」に描かれたお玉―自我形成と諦念（レジグナチオン）―」「国語国文学報」第一四集、一九六一・一一、五三頁）と論じる。「あきらめ」（レジグナチオン）と表記していることや論の題目に「諦念（レジグナチオン）」とあることから、浅井も「諦念」と「Resignation」を同義語として捉えていることが分かる。同様に寿台順誠も、岡崎義恵の「諦念」に関する言説等を参照して「鷗外文学の基調に「諦念」があると言われている」（『寿台順誠「諦め」としての安楽死―森鷗外の安楽死観―』『生命倫理』Vol.26 No.1、

二〇一六・九」としている。続けて〈諦念〉について、「予が立場」における〈Resignation〉の言説を取り上げて解説している。以上より、寿台も鷗外の〈諦念〉と〈Resignation〉を同一視した論展開を行っていることが分かる。

④ 対象辞典は「明治期国語辞書大系」シリーズ【普通辞書一～二一】『雅俗・俗雅辞書一～一五』（大空社）の辞典、合計三六冊である。「ていねん」の語を調査したが、全ての辞典において「諦念」の語は掲載されていなかった。どの辞典にも「丁年」や「遞年」しか立項されていなかった。続いて大正時代（一九一二年～一九二六年）に出版された二七点の辞典を確認したが、どの辞典においても「諦念」の語句解説は見られなかった。その辞典の多くには明治時代の辞典と同様に「丁年」「遞年」の語句が掲載されていた。

⑤ また英和辞典では「Resignation」について、「見放す。打任せ置く。従ウ。」（豊田千速訳『ダイヤモンド英和辞典』武田福蔵、一八八五・五、四九七頁）という解説が見られた。本解説は一種の傍観者的な態度を示す内容と見て取ることができる。

⑥ 「里芋の芽と不動の目」と大逆事件に関する研究については、大塚美保「森鷗外と大逆事件——彼の知り得た情報、および見解発信のあり方に関する覚え書き——」（『聖心女子大学論叢』第一一〇集、二〇〇八・二）に詳しい。工場法との関連については、坂崎恭平「パロディの製造〈工場〉…森鷗外「里芋の芽と不動の目」論」（『同志社国文学』第九〇巻、二〇一九・三）が挙げられる。